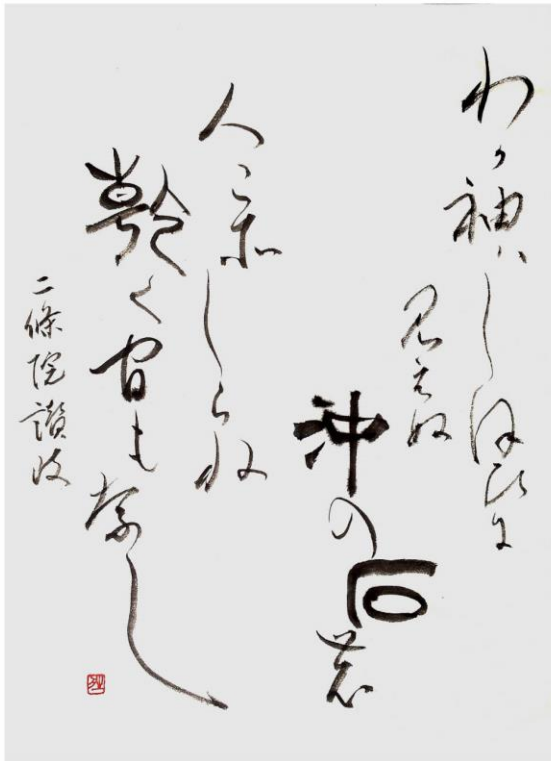


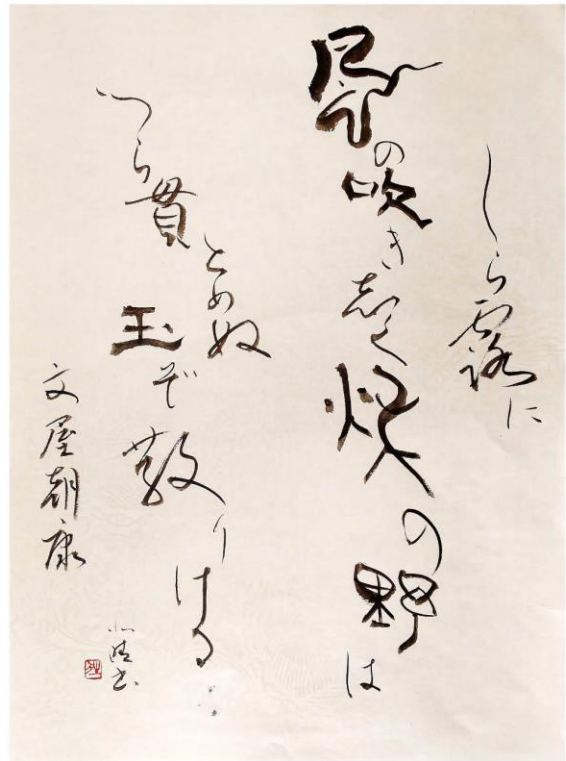
百人一首を破体で書く

文屋朝康 白露に 風の吹きしく 秋の野は 貫き止めぬ 玉ぞ散りける
 二条院讃岐 わが袖は 潮干に見えぬ 沖の石の 人こそ知らね 乾く間もなし
 清原元輔 契りきな かたみに袖を しぼりつつ 末の松山 波越さじとは
 小野小町 花の色は 移りにけりな いたづらに 我が身世にふる ながめせし間に
 藤原定方 名にし負はば 逢坂山の さねかづら 人に知られで くるよしもがな
 清原深養父 夏の夜は まだ宵ながら 明けぬるを 雲のいづこに 月宿るらむ
 在原業平 ちはやぶる 神代も聞かず 龍田川 唐紅に 水くくるとは
 柿本人麿 あしびきの 山鳥の尾の しだり尾の 長々し夜を 独りかも寝む
 紫式部 めぐり逢ひて 見しやそれとも わかぬ間に 雲隠れにし 夜半の月かな
 山部赤人 田子の浦に うち出でてみれば 白妙の 富士の高嶺に 雪は降りつつ

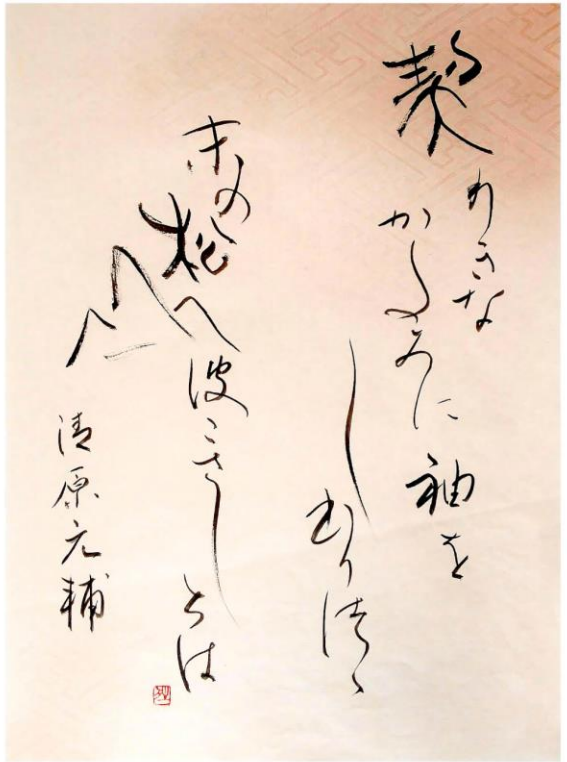
二条院讃岐
 わが袖は 潮干に見えぬ 沖の石の 人こそ知らね 乾く間もなし



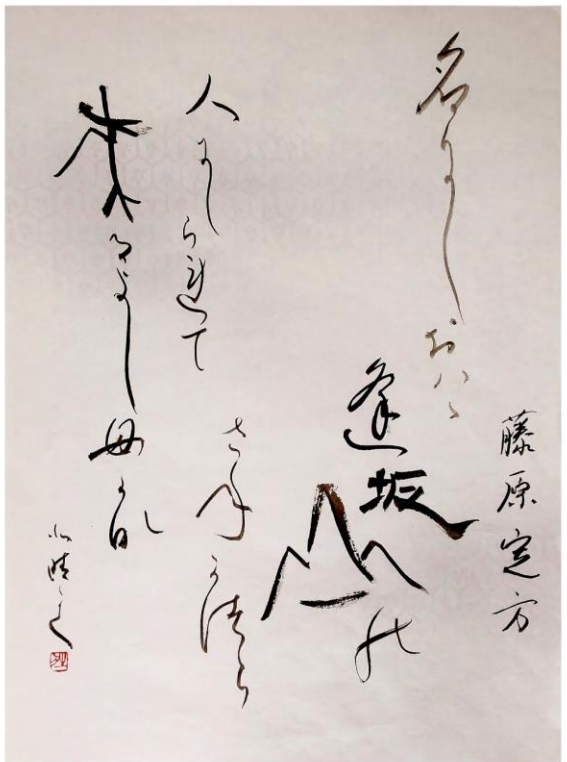
文屋朝康
 白露に 風の吹きしく 秋の野は 貫き止めぬ 玉ぞ散りける



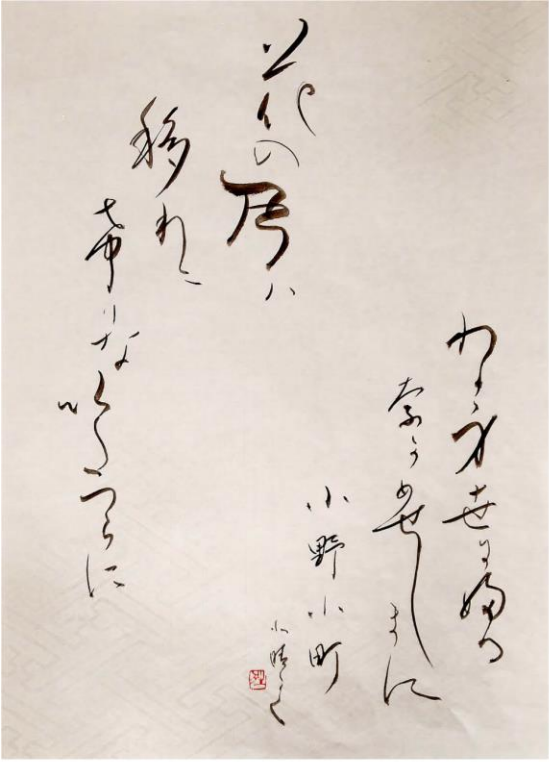
清原元輔 契りきな かたみに袖をしぼりつつ 末の松山波越
さじとは



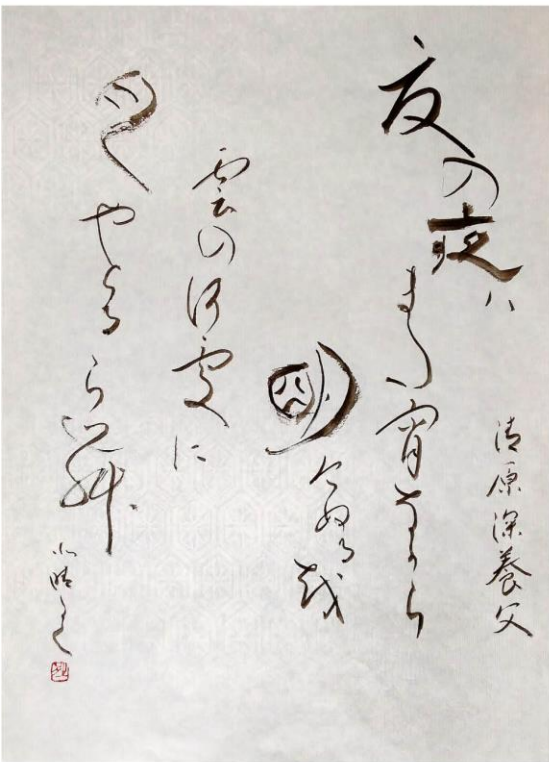
藤原定方 名にし負はば 逢坂山のさねかつら 人に知られで
くるよしもがな



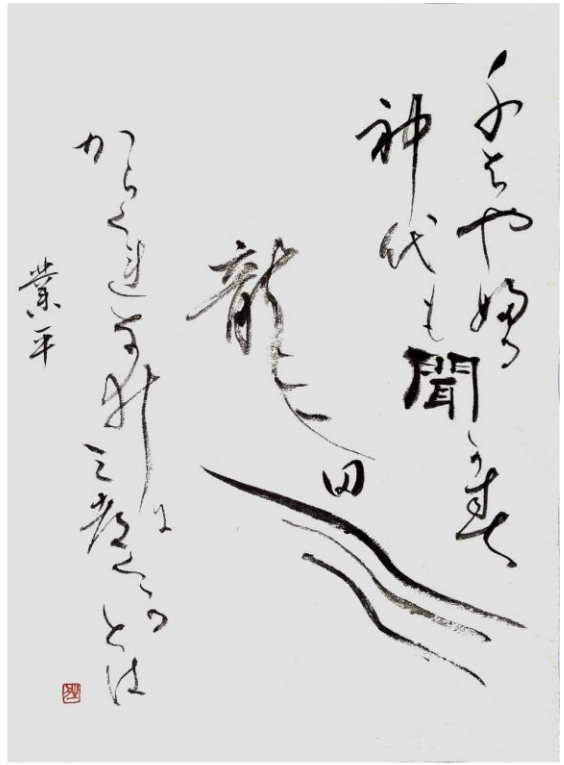
小野小町 花の色は移りにけりないたづらに 我が身世にふ
るながめせし間に



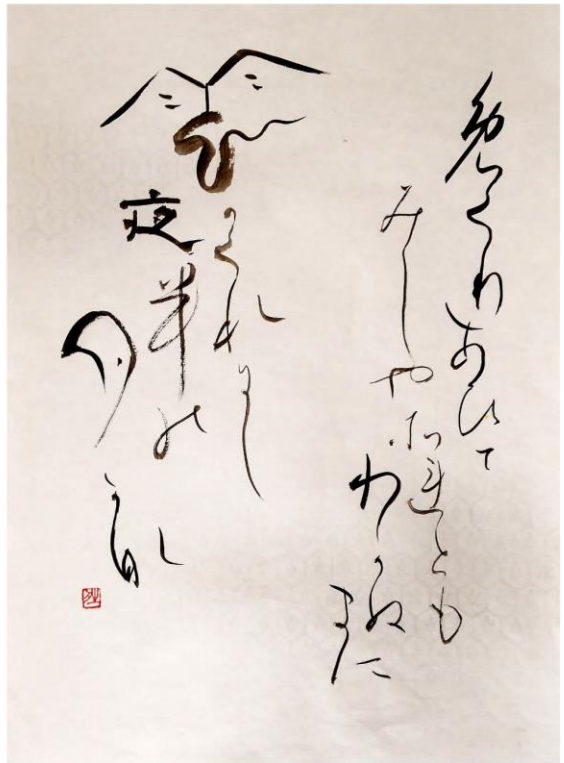
清原深養父 夏の夜はまだ宵ながら 明けぬるを 雲のいづこに
月宿るらむ



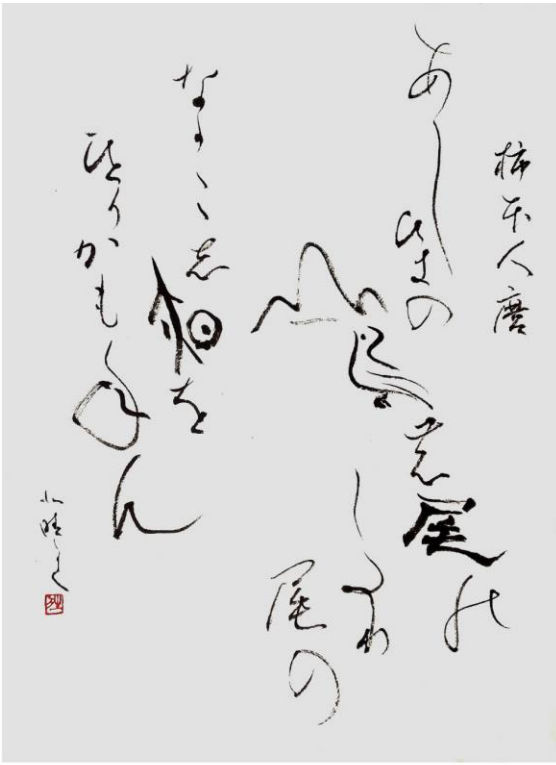
在原業平
ちはやぶる 神代も聞かず 龍田川 唐紅に水くくる
とは



紫式部
めぐり逢ひて 見しやそれとも わかぬ間に 雲隠れ
にし 夜半の月かな



柿本人麿
あしびきの 山鳥の尾の しだり尾の 長々し夜を独
りかも寝む



山部赤人
田子の浦に うち出でてみれば 白妙の 富士の高嶺
に雪は降りつつ

